

皆様、おはようございます。

先週は喜びあふれる主の復活を感謝して礼拝をおささげいたしました。

主は私たちの罪とがを背負って十字架につき、罪の身代わりとして死に、罪を贖い、三日目に死人の内より復活されました。

その喜びの朝にもかかわらず、それには似つかわしくない色々な光景が復活の朝にはありました。

女性たちは墓に主のご遺体がないのを見て途方にくれました。

喜びの知らせのために遣わされた天使たちを見て、驚き恐れて、顔を合わせることも恐ろしく、顔を地に伏せていました。

弟子たちのもとに女性たちが戻り、事の一部始終を伝えると、弟子たちはそれが愚かなこと、たわごと、空っぽの虚言と思い、せせら笑いました。

これがイエス様を信じる者たちの反応であり、対応でした。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。

そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出さない。」

私たちがまた、生ける神様を本当に生き生きとした、現在も生きておられるお方、死から復活なさった方として本気になって信じているのか、心を問われます。

今日の個所でも弟子たちの傍らを歩くイエス様のお姿がありますが、弟子たちの目は遮られていて、それがイエス様と認めることが出来ませんでした。

目の前にイエス様がおられるのに、彼らはそうとも知らずに暗い、悲しそうな顔をして、道に立ち止まるのです。

主が彼らと共におられるのに、悲しんで、立ち止まるとは、何という見当違いの出来事でしょうか。主は生きて、共におられるというのに、どうして私たちは怖がったり、悲しそうな顔をすることがあるのでしょうか。

新聖歌 474 「主がわたしの手を」

1

主が私の手を 取ってくださいます

どうして怖がったり逃げたりするでしょう

やさしい主の手に全てを任せて

旅ができるとはなんたる恵みでしょう

2

ある時は雨で ある時は風で
困難はするけれど何とも思いません
やさしい主の手に全てを任せて
旅ができるとはなんたる恵みでしょう

3

いつまで歩くか どこまで行くのか
主がそのみむねをなしたもうままです
やさしい主の手に全てを任せて
旅ができるとはなんたる恵みでしょう

4

だれもたどりつく 大川も平気です
主がついておれば 訳なく越えましょう
やさしい主の手に全てを任せて
旅ができるとはなんたる恵みでしょう

しかし、どれもこれも、私たちにとって身のつまされることです。私たちもまた、弱く、心もとなく、信ずるに遅いものです。

今日の個所を一節一節味わってまいりましょう。

13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、

14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。

15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

週の初めの日、復活の日、日曜日のこと、朝からの出来事により、弟子たちは大わらわとなっていました。

そのような渦中、主の二人の弟子たちが、そのエルサレムを離れ、11キロの道のりを離れてエマオという小さな村に出発し、二人は道々イエス様の遺体が見つからず、天使が登場し、女性たちに語り掛け、それを聞いた女性たちの証しの言葉が信じられずに弟子たちは何の事かさっぱり分からず、しかしペテロが墓に走って行ったら女性たちが言ったとおり、墓には遺体なかったという話について、半信半疑で語り合い、論じ合っていました。話しても

話しても、論じても論じても、何か霧のようなものがぱっと開けることはなかったのだと思います。

よく韓国の教会は祈る教会といます。台湾の教会は歌う教会、アフリカの教会は踊る教会と言います。それぞれよく祈り、賛美するという特色が現れていますが、日本の教会はどうでしょうか。日本の教会はよく会議をする教会と言われます。話し合い、計画を立てることは大切ですが、会議ばかりでそれだけで終わってしまっているとしたら寂しい思いがいたします。

13 この日、ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行きながら、

14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた。

15 語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

彼らはああでもない、こうでもない和白熱して話し合ったり、論じ合ったりするあまり、すぐ隣を共に歩いている人がイエス様であるということが分かりませんでした。不思議なことですが、彼らの目は厚く閉ざされ、遮られていました。

灯台下暗しなどということわざもありますが、私たちもまた、気が動転している時にまわりのもが見えていないことがあります。

シメオンとアンナは赤ちゃんの時のイエス様にすぐに気が付きましたが、祭司長、律法学者たちは全く神の子メシアであるキリストであるイエス様であるということに気が付きませんでした。

まさにマタイ13章のこの御言葉のようです。

13:14 こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。

13:15 この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである』。

しかしそのイエス様を神の子メシアと真っすぐに見もしようとしない弟子たちと、イエス様は共に歩いて下さいます。思えば私たちがイエス様に会う前に、イエス様は私たちがそうとも知らずに、どんなにか心を砕いて私たちに伴っていて下さったことでしょうか。信じてから後も、どれほどそうと知らずに、悲しんだり、戸惑ったり、不安になって心がいっぱいいっぱいになっている時、私たちの心の目が厚く閉ざされている時、私たちと共に傍らを歩き続けて下さったことでしょうか。

24:17 イエスは彼らに言われた、「歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことな

のか」。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。

24:18 そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

24:19 「それは、どんなことか」と言われると、彼らは言った、「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でしたが、

24:20 祭司長たちや役人たちが、死刑に処するために引き渡し、十字架につけたのです。

24:21 わたしたちは、イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました。しかもその上に、この事が起ってから、きょうが三日目なのです。

「あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか」。

ご存じないのですかと尋ねているのは、他ならない十字架につかれたイエス様ご自身なのに、弟子たちの方こそ、イエス様と共に一緒にいながら、あなたたちはどうしてこの目の前におられる方がイエス様だと「ご存じないのですか」とこちらが聞きたくなるような箇所です。

「ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者」だったということが分かりながら、「人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」というその力ある語られた言葉をすっかりと忘れてるのがこの弟子たちでした。

それがしばしば私たちにも起こる問題です。

私たちは自分たちの悲しみや思い煩い、心配や不安の中で、主が語って下さったことを忘れ、すぐに目の前に愛する主がいて下さることに気付かないのです。

22 ところが、わたしたちの仲間である数人の女が、わたしたちを驚かせました。というのは、彼らが朝早く墓に行きますと、

23 イエスのからだが見当たらないので、帰ってきましたが、そのとき御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです。

24 それで、わたしたちの仲間が数人、墓に行ってみますと、果して女たちが言ったとおりで、イエスは見当りませんでした」。

25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。

キリストが苦しみを受けるべきことは、苦しまなければならないことは、私たちの救いのた

めに必要なことなのでした。そして、その苦難を受けて栄光に入ることは予告させていた通りの事ではないか。

「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」愚かで、無知で、預言者たちの語ったこと全てを信じるに遅い者。信仰をもって、自分の大切なものを、その力強い約束のゆえに、信じるべきお方に託すことが出来ない者たちよと、イエス様は弟子たちのことを嘆かれました。

27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。

28 それから、彼らは行こうとしていた村に近づいたが、イエスがなお先へ進み行かれる様子であった。

29 そこで、しいて引き止めて言った、「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています」。イエスは、彼らと共に泊まるために、家にはいられた。

30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、

31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。

32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」

こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、イエス様は聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされました。

この事が、後にこの二人の弟子たちが話す、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」という出来事の時でした。

主が御言葉を解き明かされ、説明される時。この説明されるという言葉は、他ならぬ、「開く」という意味を持つ言葉なのです。すなわち、この説き証しが、ズバリ目を「開く」出来事となったのでした。

詩編 119:129 あなたのあかしは驚くべきものです。それゆえ、わが魂はこれを守ります。

119:130 み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます。

119:131 わたしはあなたの戒めを慕うゆえに、口を広くあけてあえぎ求めました。

119:132 み名を愛する者に常にされるように、わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。

119:133 あなたの約束にしたがって、わが歩みを確かにし、すべての不義に支配されないようにしてください。

こころを明々と熱く燃やされた彼らは、勇気を得、希望を得、力を得、そのイエス様のおことばを、聖書の説き証しを、心燃やされる聖書がイエス様について語る言葉をもっともっと聞きたいと願いました。そして日も傾きましたから、ここにとどまって下さいと懇願します。昔も今も、聖書がイエス様について語っている言葉であるということが指し示され、解き明かされる時、私たちの心は内に燃えます。聖書の中のイエス様が私たちの生活の中に輝くとき、私たちが信仰によってイエス様を御言葉から指し示され、理解する時、私たちの心は燃やされ、生きる力が湧きあがるのです。

30 一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、
31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。

32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。

33 そして、すぐに立ってエルサレムに帰って見ると、十一弟子とその仲間が集まっていて、
34 「主は、ほんとうによみがえって、シモンに現れなされた」と言っていた。

35 そこでふたりの者は、途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した

もはや彼らは疲れも吹き飛び、喜びのあまり、日が傾きかけているのに11キロメートルの旅路をものともせず、愛する共に信じる者たちを励ますため、喜びを分かち合うためにと一目散に来た道を帰ったのです。

復活の話の渦中を抜け出るように出発し、足取りは重く、話し合っただけ論じ合っただけが明かず、悶々として悲しそうな顔をして道の立ち止まった彼らとは別人となって、主の語りかけられる聖書の御言葉の約束を握りしめ、疲れを覚えることもなく突き進む彼らの姿がここにはありません。

私達も、主が伴ってくださり、語りかけて下されば、どんな失意の、出口の見えない、積然としない迷い道も、悲しみの道も、逃げ行く逃れの道も、心燃やされ、元気が、喜びが、希望にみなぎる勝利の道へと取って返して導かれることになると信じます。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。

先週の個所にて私たちは、何と人は容易に途方に暮れ、恐怖に陥り、そして神様の尊い御業を愚かな故無き話のように捉えてしまうものです

が、今日の個所でも悲しく立ち止まり、目は堅く閉ざされ、愚かで心鈍く、希望の御言葉を聞きながらも信じていないものであることを教えられます。どうか私たちの人生の道々に語り掛け、心の目を開き、希望と信頼と喜びのうちを進ませてください。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン